※
Impact Research of Art Project
“Day After Tomorrow Newspaper Cultural Department”
in Azamihira village
Research report / Abstract

地域におけるアートプロジェクトのインパクトリサーチ

「莇平の事例研究」活動記録と検証報告 概要版

NPO recip

東京文化発信プロジェクト

tarl TOKYO ART RESEARCH LAB

「莇平の事例研究」活動記録と検証報告　概要版

1章 はじめに

「一般的に、アートプロジェクトにおいては多様な人々の参加やその終了にいたるまでの過程が不可欠だが、多くの場合こうした要素はほとんど可視化されない。『作品』として残るものを除き、そうした関係性や過程は、関わった人々の私的な記憶にとどまっているのが現状である。昨今ようやくアートプロジェクトの記録や調査検証の重要性が指摘されるようになってきたが、これにはプロジェクトの現場のニーズの高まりだけでなく、事業主体（行政など）からの『評価』の要請が関係している。ただ、単年度で成果を求められることの多い事業評価の現状では、目に見えて残るものや数値化しやすい表層的なデータなどに注目が集まることとなり、結果としてアートプロジェクトをつくりあげた人々の関係性や記憶は、「記録」や「調査検証」という言葉のもとでも、なお埋もれたままとなってしまう」。

これは、2012年度に実施した「種は船 in 舞鶴」を対象とした「記録と調査のプロジェクト『船は種』活動記録と検証報告」に記した部分である。本年度はこの問題意識を引き継ぎつつ、「莇平（あざみひら）の事例研究」と題して、開始から11年目を迎えた莇平「明後日新聞社文化事業部」（以下「明後日新聞社」と表記）のこれまでの活動を対象に、記録と調査の方法を設計・実践・検証する。

ここでは、あらかじめ設定した仮説に沿ってデータを収集・検証する社会調査の手法をもとにした調査を行なっている。データに関しては、主としてインタビューを通して莇平集落の人々や莇平を訪れる人々の多様な語りを収集しているが、一方で言葉では語りきれないさまざまな情景や表情も基礎資料として残すべく、莇平の1年間を映像で記録したドキュメント映像を制作した。その結果は「莇平の事例研究」活動記録と検証報告（調査概要と資料からなる報告書とドキュメントDVD、以下「活動記録と検証報告［完全版］」と表す）として公表するが、本リーフレットはその調査概要を抜き出したものである（3章は活動記録と検証報告［完全版］第Ⅰ部3章の内容を一部割愛している）。

なお、この「莇平の事例研究」は、アートプロジェクトの長期的な成果を調査し検証する手法づくりを行なうTokyo Art Research Lab（TARL）「アートプロジェクトのインパクトリサーチ」の一環として、「明後日新聞社デジタル・アーカイブ設計」と並行して実施された。

この場をお借りして、インタビュー調査と撮影に応じてくださった莇平集落のみなさん、明後日新聞社と「大地の芸術祭」関係者のみなさん、またアンケート調査にご協力くださった全国の関係者の方々に、心よりお礼申しあげます。

NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト［recip］
2014年3月

2章 調査設計

社会調査とは、社会事象を対象とし、現地調査でデータを直接収集し、それを処理・分析・記述する過程のことをいう。重要なのは、データの客観性と分析の妥当性、そして方法を明示することである。これによって他者も追調査や応用調査が可能となるからだ。以下、本チームの実施プロセスに沿って、調査手順をまとめる。

1 目的

誰が・何を・何のために調査するのかを明確にする

地域におけるアートプロジェクトの長期的な成果を調査し検証する手法づくりを行なうために、莇平での「明後日新聞社文化事業部」の過去10年間の活動を対象に、記録と調査を実施する。

2 資源

予算、人員、日程を確保する

予算＝TARL（東京文化発信プロジェクト室）
人員と日程＝5章を参照

3 仮説

事業目的に応じて仮説を立てる

「大地の芸術祭」は2000年より地域活性を目的に掲げ開催されている。現在、その指標とされているのは経済効果や交流人口増加などの数量的な成果だが、そこからは人々の関係性の変化、いわば「交流の質」のありようは見えてこない。そこで今回の調査では、「莇平『明後日新聞社』においては、人々の新しいつながりが生み出され、地域の中に集積されているのではないか。そしてそれは、産業や観光による地域活性化とは異なる、今後の社会におけるオルタナティブな地域活性のありようを示しているのではないか」との仮説を設定した。

4 指標

仮説を検証するため要素を設定する

人々の新しいつながりや関係性

5 対象と方法、質問項目

カテゴリーごとに、仮説を質問項目に落とし込む

カテゴリーと調査方法は下記のとおり。
質問項目は3章を参照

◉A 莇平の住民（全21戸）——インタビュー
◉B「明後日新聞社」を訪れる人々
——インタビュー（B1）とアンケート（B2）
◉C「大地の芸術祭」主催者——インタビュー

6 実施

現地でデータを収集する

概要は5章、内容は活動記録と検証報告［完全版］第Ⅱ部1〜3章を参照

7 データ集計、仮説検証

データから指標を抜き出し仮説に沿って検証する

3、4章を参照

8 調査結果の公表

冊子かデータか等、最終報告の形を決めて制作し公表する

活動記録と検証報告［完全版］（報告書・ドキュメントDVD）
および概要版（本リーフレット）

3章 調査結果

A 莇平の住民、B 莇平「明後日新聞社」を訪れる人々〔インタビュー（B1）とアンケート（B2）〕、C「大地の芸術祭」主催者に対する調査結果をまとめる。以下は活動記録と検証報告［完全版］第Ⅰ部3章の内容を一部割愛している。全データは、活動記録と検証報告［完全版］第Ⅱ部を参照。

Aでは、全21戸のうち不在がちな3軒を除く18軒（のべ20組）に実施、そのうち開始当時と現在の運営に主導的な役割を果たしている7軒（8組）を中心に個別インタビューを実施した。これは原則として映像撮影と並行して行ない、他の短時間のインタビューは録音のみもしくは聞き書きとした。B1とCでは、メールで調査依頼書を送付した後、本チームが現地に赴き映像撮影と併せて実施した。なおA、B1、Cのカテゴリーごとに原則同じ質問をしているが、対象者の属性に応じて変更したものもある。

またB2は過去の莇平「明後日新聞社」参加者の意識や属性を問うアンケート調査だが、対象者は「2013年12月時点でヒビノスペシャルにて氏名とメールアドレスが確認できた方々」に限られるため、この調査結果が過去の参加者全体の傾向を示すものではない。

以下、インタビューは質問項目ごとに回答の一部を（）で前後の意味を補いつつ引用し、適宜補足を加えた。アンケートは割合と自由回答の一部を引用し傾向をまとめた。インタビューの引用の後にある数字は、活動記録と検証報告［完全版］第Ⅱ部1章の番号と対応している。なお莇平では、お互いのことを屋号（この地域固有の呼び名）で呼ぶことが多く、本調査でも表記はそれに従った。

A 莇平の住民

A
01——よしん
02——むらかみ
03——げんじん1
04——いなば
05——ますや
06——げんじん2
07——なかや
08——あらたまや1
09——あらたまや2
10——おかえん
11——こびき
12——いえのやま
13——ぬげ
14——そいん
15——さかや
16——ひめきや
17——げんぜん
18——あさひや
19——あらやしき
20——まさいん
※屋号／敬称略

Q1「明後日新聞社」との関わり

◉「（2003年に朝顔を育てることが決まった後）私、みなさんに『おうちの（朝顔の）種を捨てないでもらえますかね、もらいに行きますから』って言って。（略）それでどうにか苗が間に合って、ああよかった、って」———— 04

◉「学生が来たら、使うほうだすけ（だから）。（略）こっちばかりがやってたら、ずーっとそうなっちゃうすけ、だから来たら若いしょう（衆）は草刈りだとか、力仕事とかをやらす」。「それこそ、自分の子どもに言うより強く言ってるよ」———— 01

◉「こないだも幸七（「想像する家」）にごみが置いたままになっててね。片そうかと思ったけど、俺が片すとわからないすけね。次来るまで構わないでおこうと」。「部落のものなら何でも好きに使っていいっていうのじゃないからね。長くつきあうなら、とくにそういうけじめってのは必要だよね」———— 02

◉「何かをやるときは、こうするんだよ、って手を貸してる」。「初期からやってるのはおれと尚志（本インタビュー番号06）で、（略）日比野さんのこっちのマネージャーみたいになってる」———— 05

◉「（旧莇平小学校の）管理人は、春に部落の飲み会があって『やれ』ということになった」———— 07

◉「今年から明後日田んぼの責任者をやらせてもらってる」———— 08

◉「最初は本当にもう、大騒ぎだった。稲刈りの後なんかも、カレー作ったり、漬け物持っていったり、明後日（新聞社）の子どもたちがおにぎりしたりね。でも、中には帰って家のことしなきゃいけないしょうもいるから、それはやめてくれとじじ（お父さん）が言って」———— 02

◉「集落協定（農水省の「中山間地域等直接支払制度」）を日比野さんにもおすそわけというか、田んぼの肥料とか苗とか、こちらで支援してるわけです」———— 03

このように、作業から生活に渡るさまざまな面で若い来訪者たちと接していること、またそれぞれの役割があることがわかる。そして、一度は途絶えていた集落の年中行事が復活したこととその背景については次のように語られている。

◉「小正月のときも、みんな（過去の明後日新聞社社員など）が来てずーっといて」———— 01

◉「日比野さんと学生が入るようになって、1月の賽の神の前に鳥追いが復活したの」。「盆踊りも、だんだん踊り手が少なくなったりしてるんだけど、学生が踊るようになったり」———— 05

◉「うちのせがれが小学校出た頃に、各集落にこども会を作ろうとなって、その育成会長をやっていたんです。われわれ世代はやってたけど当時の子どもがやってないことをピックアップして、冬はかまくら、鳥追い、どんど焼き。春になるとうちの田んぼを貸して田植えしたり、夏は川遊びや魚釣り大会したり。秋は稲刈りした後、収穫祭をして。（略）それをぜひとも日比野さんに継続してもらいたいなという考えがあって。2年目、3年目からそういうのをちょっとずつ出していって（笑）。最初は鳥追いとどんど焼きだね。それから様子を見て、うまく乗ってくれたな、と。今度は、連中が来るとご飯を食べるから田んぼでもさせるかと。やるかね？と言ったら、やってみるか、となって、明後日田んぼ始めたんだ」———— 03

Q2 10年間をふりかえって

◉「あのとき（2003年、麻縄が雨で縮んで杭が抜けてしまったとき）は本当に面倒みたよ、2人（夫婦）で。夜に見に行って、打ち直したり、それが大変だったね」———— 01

◉「やっぱり子どもたちを泊めるのは大変だったね。生活が狂うもん。お父さんは『自分らが食べてるのと一緒でいい』って言うけど、やっぱり自分の子が来ても、若い人がいると一品違うでしょ」———— 02

◉「当時は新聞社イコール我が家みたいなもんで、日比野さんも我が家に寝泊まりしてて、大変でした（笑）」———— 03

◉「集落センターで泊まりきれないとき、個別の家で泊めて、大変な思いをするのは母ちゃんたちだった」———— 07

◉「みんなが来てくれりゃ、大変だとは思うけど、それなりに楽しんでる」———— 01

◉「もう絶対泊めないって言ってたのを変えてくれたのも、結局学生さんだもんね。いい子たちが来てくれるから」———— 02

◉「作業が終わってみんなで飲んだりするのはいいですよね。賑やかだし」———— 06

◉「自分たちも楽しもうって気持ちになってる」———— 08

この引用は本当に一部にすぎない。集落の人々からは、「大変だけど楽しい」「楽しいけど大変」ということが、実にさまざまなエピソードを通して語られている。

Q3 莇平集落の変化

◉「全部が全部、はい泊まってくださいなんて言うわけない。（略）3年目ころか、行事をやってたら一緒に飲むようになるから、だんだん距離が縮まってきたかな。今ではみんな受け入れてくれてるしさ。そりゃ『経済効果がないのに』って、みんなが思うことさ」。「経済効果じゃなくて、楽しむことが大事だってことを、部落の人がわかってきたのが一番いいんじゃないの」———— 01

◉「みんながみんな賛成なわけじゃないからさ、最初は。ただ、表立って反対はしない」。「維持できてるってのはいいことだ。それだけだろうね。変わらなかったことが変わったことだろうな。部落の数は同じかもしれないけど、心、意識的に変わらないってことが、変わったってことだろうね」———— 02

◉「集落の人も変わってきたよ。当初は半分くらい反対してたもんね。（略）こっちで間口広くとっておけば、みなさん賛同してくれる。（略）10年というキャリアがあるから納得してもらえたんだろうね」。「年寄りがいたりすると、手伝いたくてもできない人もいるから。それを無理にさせるようなことは、ね」———— 03

◉「10年にもなれば、一生懸命やってきたしょうは大変だったろう。おれらは（略）それほどできねえから、何とも言えねえ。協力はいくらでもするけどね」————10

◉「最初は反対してたしょうもね、今はこういうふうになってる（笑）（収穫祭の宴会）。ただ、おんぶにだっこじゃいけないと思うけどね」────12
◉「最初の頃は、何だろうなって、半信半疑でみんな見てたけど、年を重ねるごとに一体化していったというか。部落でもイベントとかやってたけど、よりいっそうまとまりが出てきたというか」────18

受け入れ時には集落の人々の間にも役割の違いだけでなく温度差があったこと、続ける中で徐々にそうした温度差が小さくなってきたことがうかがえる。そして、そうした意識の変化の理由としては、次に挙げるように集落の活気が戻ってきたことが大きいようだ。

◉「村に若いのが来るのはいいことだ」──── 01
◉「今も賛否両論あるけど、でもこれ（明後日新聞社）がなかったら、行事もなくなってたろうね」──── 02
◉「行事も、なんだかんだ言って人が多い、若い子がたくさんいるって、年寄りは喜んでるよね」──── 05
◉「じいちゃんたちも、収穫祭で飲んでても、若い子がいると楽しそうですよ」──── 06
◉「日比野さんが来たときと来る前だと、楽しみ方が少しずつ変わっていってる。部落の行事は基本的には変わってないけど、よそから来てくれることに関して少しずつ慣れてきた」──── 07
◉「おじいちゃんおばあちゃんなんか、自分の孫よりかわいがってるんじゃないか、って人もいるし。いい笑顔する。全体的には、村自体が明るくなった」──── 08
◉「集落のみなさんが高齢化してきて出席する人が少なくなってきた中、こういうイベント（収穫祭）を大勢でお祝いできるってことはよかったんじゃないか。（略）（自分は「大地の芸術祭」開始）当時、（略）『芸術より産業だろ』って唱えた側の人間だからね」────13
◉「賑やかになっていつも楽しみにしている」────15

そしてもう一つ、人々が対外的な自意識を持つようになったことも大きいだろう。

◉「今はもう他の部落の見る目がだいぶ違うしさ」。「『おまえた（おまえたち）の部落のとこに、まーたでっけえバスが行ったけど、何だあ』って。興味もつわけだ、『また何かあらあか』って。そしたらもう、大いばりで話す（笑）。人はどうでもいいすけ、自分でそう思ってな（笑）」──── 01
◉「継続することが、みなさんに紹介できたり、自慢できることでもあるし」──── 03
◉「来るんだったら、レジデンスに泊まって、朝、本当の朝顔見て帰って欲しいよね」──── 05
◉「こんな田舎でも喜んで来てくれる人がいるのがすごく嬉しい」──── 08
◉「外から来てくれると、若い人なんかの違う考え方が入ってくる。すると考え方も前向きになるというか、莇平にもいいところがあるのかな、って新たに感じる」────18

Q4 自分や家族に起きた変化

◉「うちらはもう長年やってるから、行事みたいに、出るのが当たり前」──── 02
◉「自分としては、ここまでくればもう習慣ですよ（笑）」──── 06
◉「見ているうちになんとなく納得してきた」────17
◉「学生なんてさ、やることが目的であって、早くやらなくても楽しみながらやればいいから」。「合理的じゃないんだよね。村のしょうからすれば、スピードだけどさ。自分で感じることは、価値観の違いね。『違うんだなー』ってことがほんとにわかったね」──── 01
◉「芸術祭の話はどこでも話せるな」。「自信もってしゃべれるようになったんだよね、いろんな人と接してると」──── 01
◉「小学校の卒業式で、一番上の子が、『日比野さんみたいな芸術家になりたいです』って言ったのね」──── 05

A
01──よしん
02──むらかみ
03──げんじん1
04──いなば
05──ますや
06──げんじん2
07──なかや
08──あらたまや1
09──あらたまや2
10──おかえん
11──こびき
12──いえのやま
13──ぬげ
14──そいん
15──さかや
16──ひめきや
17──げんぜん
18──あさひや
19──あらやしき
20──まさいん
※屋号／敬称略

Q5「アート」もしくは日比野克彦さんについて

◉「日比野さんのあれ（明後日新聞社の関係）でいろんな人に会わせてもらってる」──── 01
◉「大勢の人に会わせてもらった」──── 04
◉「明後日（新聞社）の人たちは結構考えてくれててね。お年寄りで孤立しそうな人がわかるのか、そういう人のところに行く。それは感心する。集落の人たちと、偏らないでつきあってる。そういうのは感謝してますね」──── 03
◉「アートって言われても、考えてもわからないんで。（略）『これもアートなんだ』って思いながら」──── 06
◉「（最初は）飲み込むまでにちょっと時間がかかった。芸術といえば、美術館にあるようなものかなと思っていたから。朝顔は普通に各家庭で育てるものだし。今はそれでもだいぶ飲み込めたけど、ときどきあれ？ってのはある」──── 07

Q6 今後の展望、期待すること

◉「これからはなおさら、ある程度お互いに話し合ったりしていかねえとと思うし」──── 01
◉「大変だ、大変だの言葉が耳に入ってくるようになった」──── 02
◉「部落の人たちの負担をなるべく軽くしてもらえれば」──── 07
◉「今度は、継続の中にお互いに何かを見つけることだな。（略）ふるさとで楽しいことやってるな、帰ってみようかな、ってなるのが理想かな。来る者をはねるんじゃなくて、共存という形でね」──── 03
◉「来る者拒まず、去る者追わずで」──── 02
◉「今後も、続けていくのがいいんじゃない？でもそれが一番力いるからね。その中で去年とは違う何かをしようかなって」──── 05
◉「若いのが4人いるから、今度は俺らがついていけばうまくいくんじゃないか」──── 01
◉「莇平に住んでくれる子が出てくるといいのかな」──── 06
◉「今来てる学生が結婚して子どもができて、家族旅行のときに『莇平行ってみようか』となったら一番理想」──── 08

B1 莇平「明後日新聞社」を訪れる人々（インタビュー）

Q1 莇平との出会い、「明後日新聞社」との関わり、など

◉「（2003年の開始時）われわれも学生で図々しいというか、遠慮せずに泊まって、朝になると自然にご飯をいただいて。今思えば本当に図々しいんですけど、（莇平のみなさんは）自然に迎えてくださった」。「（最初の朝顔は）半分は買った種ですけど、半分はおばあちゃんが苗を持って来てくれたんですね。呼びかけたわけじゃないのに、自発的に来てくださって、何も言わずに手伝ってくれた」────21
◉「僕はアーティストとして、莇平と明後日新聞社の関係という観点から現状を見ています。やっぱり莇平という集落自体に惚れてますからね。僕自身が最初に関わった地域で、何もわからない状況からいろんなことを感じ、思考する現場だった」────22
◉「自分たちが関わるようになった頃は集落センターに泊まったりしていたので、何かしなくては（集落の人と）交流する機会がほとんどなくて。それで、（略）ひとりでどなたかの家に泊めてもらいに行くようにしていました」────23

B
21──杉田尚紀さん
明後日新聞社初代編集長
（2003年）
30歳代男性

22──北澤潤さん
明後日新聞社5代目編集長
（2006～2009年）
20歳代男性

23──船井伊智子さん
明後日新聞社8代目編集長
（2011～2012年）
20歳代女性

24──金田鈴美さん
明後日新聞社9代目編集長
（2012～2013年）
20歳代女性

25──森本早紀さん
ヒビノスペシャル9代目アシスタント
（2011年～現在）
20歳代女性

26──米津いつかさん
ヒビノスペシャル6代目アシスタント
（2001年～2006年）
30歳代女性

27──日比野克彦さん
明後日新聞社社主

Q2 **莇平の人たちとの関わり**

◉「できるだけいろいろな人と顔を合わせて、コミュニケーションを密にとりながら、新聞を配るというのをちゃんとやりたいと思った」。「僕は関わりを芸術祭に特化しない、日常的にしていくっていうことの、ひとつの到達点、濃さを見せられたと思います。交流の密が生まれていたと思うので」————22

◉「編集長になった頃は、ファッションショーや交流をしっかりやった後なので、村の人の気持ちがわかりすぎていて、記者のように第三者的な立場で話を聞ける状況ではなくなってきていました」。「学生がいない間、田んぼや畑の世話を集落の人たちがやってくれていることを、申し訳ないと思っていた」。「今は莇平が知らない土地じゃなくて実家のように感じています」————23

◉「私たちの代が編集をするようになってからは、芸術祭じゃないから人はそんなにいない。(略)でもそのかわり大人数じゃないからこそコアな部分に入れるので、深く関われたなと思います」————24

◉「集落の方々には、大変ご迷惑をおかけしているので、みなさん言いたいことがたくさんあるだろうなと思います。それでも、(略)日比野さんが通い続け、継続することで築いた信頼関係もあると思いますが、集落の方々が新しい子も長い付き合いの子も分け隔てなく受け入れ、寛容でいてくれる」————25

◉「時に厳しいお叱りも受けて、地域に入る時の心構えというのは、私は莇平でずいぶん学ばせてもらいました」。「集落のみなさんはずっとそこに住んでいるから行きさえすれば会えるので、『会いたい』というシンプルな感覚でつながっている土地なんです」————26

◉「莇平の得意とするところは、自分が動かなくても周りが寄ってくるっていうこと」————27

Q3 **学生たちとの関わり、など**

◉「関わる学生にも学校や自分たちの制作、就職活動などがあって継続が難しいため、人が代わるごとに引き継ぎをしないといけないのですが、(略)新聞のデータが見つからなかったり、新聞の号数が飛んで発行してしまったことがわかって」————25

◉「莇平という場所を使って表現をする人も出てきて、莇平との関係を重ねて集落の方々を巻き込んだり、この土地との関わりがあるからこその作品も生まれています」————26

◉「『想像する家』もそうだし、編集長も編集部も、いろんな行事に参加する学生、若手作家たちも、莇平をひとつのインターンシップ的なテストパターンとして活用してもらえればいいね」————27

Q4 **今後の展望、期待すること**

◉「今は家族もいるので、全員の旅費を出したり小さい子どもを連れて行くのは大変で…。不義理をして申し訳ないです」。「勝手なことを言えば、莇平は変わらないでいてほしいと思うんです。けど、そうもいかないでしょうから、人が増えるとか、少しずついい方向に変わっていけばと思います」————21

◉「莇平においてっていうのはやっぱり非常に言いづらいですね。形成期のどうしようもない時期をお世話してくれた人たちなので。そこをどうなっていったらいいとか、調子のいいこと言えないんですけど」————22

◉「イベントを毎年続けていきたいなと思っています。が、この数年でかあちゃんたちは年老いていく問題を実感したので、続けていくのは難しそう」————23

◉「明後日新聞社の10年をずっと見続けている人・支える人とは別に、管理し・把握できている人が数人いてくれたら」。「美大生に限らず、もう少し間口を広げる工夫をすればいいのかも」————25

◉「最近は、明後日新聞社をどうにかしていかなきゃいけないということを若い人たちが中心になって考え始めてくれています」————26

B
21——杉田尚紀さん
明後日新聞社初代編集長
(2003年)
30歳代男性

22——北澤潤さん
明後日新聞社5代目編集長
(2006～2009年)
20歳代男性

23——船井伊智子さん
明後日新聞社8代目編集長
(2011～2012年)
20歳代女性

24——金田鈴美さん
明後日新聞社9代目編集長
(2012～2013年)
20歳代女性

25——森本早紀さん
ヒビノスペシャル9代目アシスタント
(2011年～現在)
20歳代女性

26——米津いつかさん
ヒビノスペシャル6代目アシスタント
(2001年～2006年)
30歳代女性

27——日比野克彦さん
明後日新聞社社主

◉「種でさえ、10年同じところで植え続けてると、病気になったり弱くなってくるから、混ぜていかなくちゃいけない。人間で言うなら、莇平で新しい家庭ができたり、居住者が入ってくるのが一番いいし、望むとこだと思うけど。プロジェクトで言うなら、今平均的に流れているものがこのままいくのか、少し低空飛行で遠くに飛ぶようにエネルギーを使っていくのか、一瞬一発いって急降下していくのか。僕は、遠くの時間まで続けたいというのがある」。「最初はよしんさんやむらかみさんの世代が明後日新聞社を応援してくれて、今は尚志や英学に頑張れよってバトンタッチしてる。彼らは新聞社のスタッフとはより近い世代だし、いい意味で一緒に悩みながら次の村の姿を作っていこうという思考はあると思う」————27

B2 莇平「明後日新聞社」を訪れる人々(アンケート)

(1)**回答者の属性**

回答者の属性は、年齢は30歳代が15人(44%)と最も多く、次いで20歳代が9人(26%)、40歳代が5人(15%)、50歳代3人(9%)、10歳代・60歳代が1人(3%)だった。性別は男性が13人(38%)、女性が21人(62%)だった。現在の職業は、正社員・常勤職員が11人(32%)、自営業・自由業が9人(26%)、学生が8人(24%)、パート・アルバイトが2人(6%)、主婦・家事手伝いが1人(3%)、団体職員・教員・学芸員が各1名(3%)だった。現在の住まいは、東京都が12人(35%)、新潟県が5人(14%)、神奈川県と京都府が各4人(12%)、茨城県が3人(9%)、千葉県が2人(6%)、青森県・宮城県・鳥取県・熊本県が各1人(3%)だった。

(2)**「明後日新聞社」に参加した年度とその行事／プログラムすべて**

年度では「大地の芸術祭」開催年である2003(37人)、2006(42人)、2009(55人)、2012年度(89人)が、その前後年度に比べて多かった。また行事／プログラムでは、「盆踊り」(83人)、「大地の芸術祭」(81人)、「収穫祭」(64人)、「明後日新聞社」(63人)、「小正月」(57人／ただし2013年度分は未集計)の順だった。「その他」は「アサッテカップ」(3人)、「想像する家」関連(2人)、「あざみひら演劇祭」(1人)、「種は船プロジェクト」(2人)、「明後日新聞熊本支局」(1人)、「横浜FUNEプロジェクト」(1人)、「草刈り」(1人)だった。

(3)**1でチェックをした行事／プログラムの中からとくに印象に残っているものを3つと理由**

年度では「大地の芸術祭」開催年である2003(5人)、2006(3人)、2009(7人)、2012年度(19人)の行事／プログラムが比較的多かった。行事／プログラムでみると、「大地の芸術祭」(13人)、「小正月」(11人)、「盆踊り」(7人)、「収穫祭」「あざみひら演劇祭」「想像する家」関連(各4人)、「アサッテカップ」「ゴロゴロ莇平」(各3人)の順に多かった。そして「印象に残った理由」の自由回答をみると、内容は大きく2種類に分けることができる。

まず莇平の年中行事やイベント・プログラムとの出会いそのものに対する驚きや感動を挙げたもの(26件)である。「初めて参加した」(盆踊り)、「初体験」(あざみひら演劇祭)、「久しぶりに寄せてもらった」(盆踊り)、「伝統的な行事に参加した」(小正月)、「あんなに水をかぶったのは初めて」(ゴロゴロ莇平)、「何もかもが目新しく、とてもワクワクした」(田植え)、「地元の人たちの普段からの習慣である収穫祭を一緒にできた」(収穫祭)、「雪で一変した景色」(小正月)、「地元の方が手際よく稲を刈る姿」(稲刈り)、「観客と出会うという演劇の醍醐味を再確認」(あざみひら演劇祭)のように、行事やイベントを媒介に新たな体験や出会いが生まれ、その人の価値観がゆさぶりをかけられている様子がうかがえる。

もうひとつは、明後日新聞社と集落の人々との交流のあり方に関するもの(15件)である。「集落の方々と日比野さんとの関係性」(アサッテカップ)、「地域の人たちと交流」(盆踊り)、「村の人と創作」(ビストロアザビロ)、「住民の方たちと触れ合えてよかった」(雪かき)、「地域の方々の協力が作品を支えている」(小正月)といった回答が挙げられる。「いろいろな地域の人が集まれてよかった」「舞鶴の一般参加者による種の根を莇平のおばあちゃんに渡せた」(ともに「種は船」報告会)も、このカテゴリーに含めてよいだろう。こうした回答からは、参加した人たちが行事やイベントだけでなく、その背景にある人々の関係性に思いを巡らせていることがうかがえる。

(4)「明後日新聞社」に参加しようと思った理由（複数回答）

最も多かった回答は「日比野克彦さんに関心があった」(30%)で、次に「大地の芸術祭に関心があった」(22%)、「自然や田舎暮らしに関心があった」(12%)、「まちづくり・むらおこしのプロジェクトに関心があった」(11%)、「大学の授業の一環」「職務の一環」(各7%)と続いた。「その他」には、全国の明後日朝顔プロジェクト開催地域の人がその発祥の地を訪れたケースが4件、日比野克彦さんや他の参加者から誘われたケースが4件、「ことが起こる在り様を多角的に観察したかった」という回答もあった。

(5)「明後日新聞社」に関する7項目ににについてどのように感じるか

「とてもよい」と回答した人が最も多かったのは「食べ物がおいしい」(76%)、「集落の行事に参加できる」「日比野克彦さんと交流できる」が(71%)、「自然と触れ合える」「集落の人たちと交流できる」(68%)、「アートプロジェクトに参加できる」(62%)と続いた。「共同生活ができる」を「とてもよい」と回答したのは23%だった。一方、これらの項目を「悪い」と感じた人は、すべての項目で3%だった。

また「とてもよい」と「まあよい」を合わせ「よい」と感じる人の割合が多かったのは「アートプロジェクトに参加できる」「自然と触れ合える」「集落の人たちと交流できる」で、合わせて97%が肯定的な評価をしていた。一方これと比べ、「あまりよくない」と「悪い」を合わせ「よくない」と感じる人の割合が上に挙げた項目と比較して多かったのは「共同生活ができる」「日比野克彦さんと交流できる」で、合わせて12%が否定的な評価をしていた。なかでも「日比野克彦さんと交流できる」は、さきにみたように「とてもよい」と答えた人の割合も2番目に多かったことから、回答の分散が大きいことがわかる。

(6)「明後日新聞社」に関わったことで、自身に何か変化があったか

「ある」と答えた人が31人で、9割を超えた。その内容は、大きく3種類に分けることができる。まず、「想像力を働かせるようになった」「物事の考え方が多面的になった」「日常の価値観、人との関わり方」といった、文字通り自らの価値観の変化に関するもの(22件)である。次に「アートが集落の活性化、村おこしに貢献していることを感じ」「人と人を繋ぐことに、アートや一人のアーティストが大きな影響を与え得ることを体感した」「アートが地域に存在する、新しいカタチを実感できた」「この種のアートプロジェクトの社会的意義が体感できた」のように、地域におけるアートプロジェクトの機能に関するものである(6件)。そして「仲間が暮らしているところ、大切なみんなのホーム的に親近感を持つようになった」「帰省のよう」といった、莇平の人々への思いがうかがえるもの(6件)である。

(7)「明後日新聞社」は莇平集落に何か変化をもたらしたと思うか

「そう思う」と答えた人が31人で、9割を超えた。具体的な変化は、「はりあいが生まれていそうな気がする」「誰かを迎えるという役割が大きくなったのではないか」「東京の学生との関わりが地元の環境への関心や愛着を生んだと思う」「自分の住む地域や自分自身に誇りを持てたことが大きいとおもう」、「facebook等を使用して自ら莇平集落の日常を紹介するなど、土地の価値を認めていると感じた」というように、莇平の人々の自意識の変化についてのもの(13件)である。次に、「アーティストと集落の皆さんの相互理解と信頼関係が深まるとともに、集落の人同士の信頼関係も深まったのではないか」、「血縁でも地縁でもない縁」「スタッフとのつながりもまるで親戚のように強くなっていった」のように、莇平の人々の関係性に関するものである(11件)。そして「昔からの行事が復活して、人々の集まる機会が増えた」など、さまざまな行事をやることで、集落が活気づく「行事の復活」に関連するものである(3件)。

また、「あの小さい集落の人びと全員が、明後日新聞社の事業に積極的に関わっているわけではないだろうとも思う。参加されていない方々が、ご自分達の集落でアートプロジェクトが行われ続けていることを、どのように受け止めているのか、そのことにより一層関心があります」「正直良いのか悪いのかわからないと思うこともあるが」との回答もあった。また「そう思わない」と答えた人は「こういうイベントを受け入れてくれる大らかさがもともと備わっていたんだろうなと」、「それはおこがましいと考えます」と回答している。

C「大地の芸術祭」主催者

C
28——山田綾さん
NPO法人越後妻有里山協働機構

29——斎喜直さん
十日町市産業観光部観光交流課
芸術祭企画係係長

30——北川フラムさん
「大地の芸術祭」総合ディレクター

Q1 十日町市、莇平集落について

◉「(「大地の芸術祭」は)、地域に内在する歴史、文化、自然や風土など、さまざまな価値を現代アートを媒介にして掘り起こし、世界に発信するとともに、地域再生の道筋を切り開いていくということで進めています」。「『十日町市総合計画・後期基本計画』の中に、「まちづくりの重点方針」という項目があるのですが、芸術祭はその中の「活力ある元気なまちづくり」という項目の中の最上位に位置づけられています」————29

Q2「明後日新聞社」について

◉「10年経って、新聞社の人たちは、新たに加わった住民という感じに位置づけられるようになりました」。「莇平は先駆的なところだと思います。(略)芸術祭の中でもアーティストが先導してやっているのは日比野さんと日大くらいですね」————28

◉「芸術祭をきっかけに日比野さんはじめ明後日新聞社の人たちと集落との関係性ができあがっているなと、強く感じました。地域のさまざまなお祭りに参加するアーティストやこへび隊といったボランティアの方もいますが、そこに新たな提案を加えて色々なイベントを行なっていったりと、そういったケースは本当に先駆けであり、数少ない成功事例だと思います」————29

◉「日比野さんは10年間、よくやったと思います。よく通ってるし、相当真面目にやられている。(略)まず学校の中でやって、だんだん地域に関わって、今や莇平を地域計画として考えていくところになりつつある。10年をひとつのめどに『この人は本気で自分たちと関わってくれている』と思うようになったんだと思いますね。(略)当初の目的からみても、僕は展望があるなと思います」———— 30

Q3 事業の評価指標について

◉「(「大地の芸術祭」では)回を重ねるごとにお客さんも増え(略)、波及効果自体は県内では2012年で46億5千万(円)と出ています」。「芸術祭は、地域の情報発信、交流人口の増加、地域の活性化、その3つの目的を持って取り組んでいます。ですが、(略)一定の成果は出ているのかというのは、周りの雰囲気や芸術祭に対する評価でわれわれも感じている状態です」。「十日町市としては、選ばれて住み続けられる町というのを大きい目標に掲げております。(略)一番は地域の方々と作り上げて、地域の課題だとか、地域を元気にするものは何かと、そういうことをアーティストさんと一緒になって考えています」。「少しは雇用や人口が増えているとか、若者が来てくださるということでは、一定の効果があるなと思います」————29

◉「来場者とか経済効果はちゃんと考えます。それは僕らはプロフェッショナルだから、当然マスターしていかないといけない。そこを押さえたうえで、展望をもったことができればと思っています」————30

Q6 今後の展望、期待

◉「やっぱり課題だと思うのは、内輪にならないように開口部をどうつくるかということ」。「いろんな世代の人が関わる場所になることを望んでいます」————28

◉「アートを手法にした、同じような地域づくり、かなり増えてきていますよね。それの差別化といいますか、われわれの地域はこれが特色なのだというのを第6回展にも打ち出していきたいと思っています」————29

◉「莇平でも、日比野さんが入って、サポーターが入って、お客さんが行くということが、地域を開いている。実際に鳥追いが復活しましたね。それまでは『OBが来て何かをやる』『集落の人が何かをやる』というのが美談だったのですが、それが変わりはじめました。ひとつの集落の活動を通して、よそとつながる。他者が入って何かやるという、現実的にはそれしかないんですが、それが開かれていったプロセスがある。これは日本のこれからの地域再生の姿だし、おそらく世界的にもそうだと思います。そうやって地域をもう一度やっていくことができるかもしれない、というのが多少の希望です」————30

4章 考察

2000年に開始された「大地の芸術祭」は、3章でのインタビューでもあったように「地域に内在する歴史、文化、自然や風土など、さまざまな価値を現代アートを媒介にして掘り起こし、世界に発信するとともに、地域再生の道筋を切り開いていく」(29) こと、つまり地域活性を一つの大きな目的に掲げ開催されている。そして主催者発行の公式「総括報告書」(2013) では、「収支状況」をはじめ、「交流人口の増加」、「地域の情報発信」、また「地域の活性化」として推計経済効果が数値で示されている。一方で、インタビューで「少しは雇用や人口が増えているとか、若者が来てくださるということでは、一定の効果がある」という実感は持ちつつも、「一定の成果は出ているのかというのは、周りの雰囲気や芸術祭に対する評価でわれわれも感じている状態」(29) とあったように、数値ではとらえきれない成果や影響に関して、明確な指標があるわけではないこともわかる。

本調査では、交流人口の増加などの数量的な成果ではなく、人々の関係性の変化、いわば「交流の質」のありようを明らかにし、今後の社会におけるオルタナティブな地域活性の方向性を示そうとした。以下、4章では調査結果をふまえ、考察する。

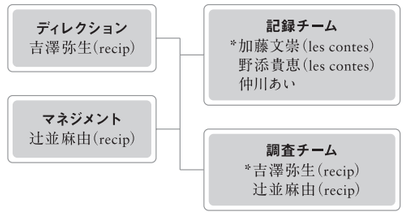
集落の人口は、本調査での集計によると10年前の63名（男性31名、女性32名）から55名（男性28名、女性27名）と減少しており、最も多い年齢層は、50歳代と70歳代だったものが、60歳代と80歳代へと上昇している。このように人口減少と高齢化が進む中ではあるが、「小正月のときも、みんなが来てずーっといて」(01)、「鳥追いも（略）学生が復活させて」(02)、「盆踊りも、だんだん踊り手が少なくなったりしてるんだけど、学生が踊るようになったり」(05) とあるように、年中行事が復活し、ここに参加するために外から訪れる人がいることが語られていた。小正月や盆踊り、あるいは収穫祭といった地域に伝わる年中行事に、「明後日新聞社」を媒介に、地縁も血縁もない若者たちが参加していることは注目に値するだろう。これについては「大地の芸術祭」主催者も、「日比野さんが入って、サポーターが入って、お客さんが行くということが、地域を開いている。実際に鳥追いが復活しましたね。それまでは『OBが来て何かをやる』『集落の人が何かをやる』というのが美談だったのですが、それが変わりはじめました」(30) と評価している。

また、こうした年中行事を通して、家族、居住地域、職場といったカテゴリーを超える関係性が生み出されていることも注目される。インタビューにあった「自分の子どもに言うより強く言ってるよ」(01)、「形成期のどうしようもない時期をお世話してくれた」(22)、「時に厳しいお叱りも受けて」(26)、「自分の孫よりかわいがってるんじゃないか」(08)、「前にここ（莇平）にいた子が、今は作家としてやってる。そういうのって（略）感じるよね」(05)、「明後日（新聞社）の人たちは（略）集落の人たちと、偏らないでつきあってる」(03)、「（行けていなくて）不義理をして申し訳ないです」(21)、「実家のよう」(23)、「『会いたい』というシンプルな感覚でつながっている」(26)、そしてアンケート自由回答の「久しぶりに寄せてもらった」、「仲間が暮らしているところ、大切なみんなのホーム的に親近感」、「帰省のよう」、「血縁でも地縁でもない縁」といった言葉からも、そうした地縁、血縁、会社や学校縁を超えた、持続性のある関係性が醸成されている様子がうかがえるだろう。

ここで生み出された新しい関係性は、人口や雇用や税収の増加といった指標でも、観光による経済波及効果といった指標でも測ることはできないが、人口減少社会におけるこれからのオルタナティブな地域活性のありようを示しているのではないだろうか。

5章 プロジェクトの事後検証

組織図



*設計実施責任者

経費内訳

調査設計・実施———— 21%
旅費———— 30%
映像制作———— 17%
リーフレット制作———— 13%
マネジメント———— 3%
諸経費———— 16%

出張回数

合計———のべ58回

	4/19	5/16	5/31-6/2	6/14	6/28	7/13-14	8/14-16	9/27-29	10/25-28	11/11-12	12/6	12/9-10	1/10-12	2/17	3/1	小計
東京	1	1		1	2					4	1	4		2	1	17
莇平			9			6	6	5	9				6			41

映像データ

391.99GB／AVCHD
（リストは活動記録と検証報告［完全版］第Ⅱ部3章に掲載）
活動記録と検証報告［完全版］付属のドキュメント
DVD（約40分）

インタビュー調査
（2013年7月14日〜2014年3月1日の間に随時）

対象者———のべ30名
文字数———約72000字

アンケート調査（回答———2013年12月3日〜17日）

メール送付数———— 154
ウェブサイト入力回答数———56

デジタルアーカイブ制作との連携

◉デジタルアーカイブ設計と共通の基礎資料として、米津いつかさん、森本早紀さん、高橋尚志さんらが作成した「莇平関わり年表」（活動記録と検証報告［完全版］第Ⅱ部4章に掲載）を活用、また関係者リストを一時的に閲覧することができた。こうした基礎資料は、調査設計（記録含む）の段階で存在しているのが望ましいが、実際は簡単なことではない。

◉アーカイブとの連携は昨年度の「種は船」調査と同様に後手となったが、調査設計・実施の段階で過去の新聞や写真を用いることができれば、より効果的にデータが収集できるだろう。

調査

◉インタビュー調査は、設計と実施を本チームが実施したが、設計者と実施者の問題意識の共有や関係性づくりのための期間が持てれば、作業分担は可能であろう。

◉アンケート調査は、個人情報保護の観点から、メールアドレスのリストアップと送信をヒビノスペシャルに依頼した。また一斉送信ではなく個別送信となったため、前出の森本さんに多くの時間を割いていただいた。調査結果をみると、多くの人が自由記述に回答しており、「明後日新聞社」への関心の高さをうかがわせたが、一方でその分量ゆえに集計と分類に予想以上の時間がかかった。

インタビューの注意事項

◉依頼書を作り、実施の日程調整をする。
◉レコーダー使用の許可を得て録音する。
◉テキストの本人確認の要／不要を確認し、必要な場合は校正のやりとりをする。

アンケートの注意事項

◉一つ一つの質問の目的を明確にする。
◉選択肢はさまざまな回答を想定して作る。
◉用紙解答の場合は用紙を、ウェブ回答やメール回答の場合は入力フォーマットを準備する。
◉住所氏名を記入する形式の場合は、その用途を明記する（個人情報の管理）。

仮説検証

◉3章の調査結果引用と4章の考察は、インタビューやアンケートの自由回答に調査者が「解釈」を加えている。データを読み込み、偏りのないよう注意を払っているが、誤りもあるかもしれない。この点については、もとのデータを掲載することで、このプロセスの妥当性を検証できるようにしている。
◉仮説は事業主体が掲げる目的に応じて設定するが、複数の組織の協働プロジェクトであれば、個々の組織に応じた仮説が立てられる。

あらためて、調査について

「大地の芸術祭」には近年、学生を中心に多くの調査者が入るという。アートプロジェクト一般に目を向けても、記録や調査の必要性が共有され、そうした取り組みは広がっているように見える。しかし実際のところ、その調査は誰が何のためにやっているのか、方法は妥当か、結果をどのように協力者ひいては社会に還元しようとしているのかがわからないケースも多い。調査される立場からすれば、インタビューや資料提供で協力したのに結果を知らされないというのはある種の搾取となり、情報を不本意な形で公開され日常生活や人間関係に影響が出てしまうような事態を引き起こす恐れもある。調査倫理の徹底が必要だなどと言うと大げさに聞こえるかもしれないが、自戒を込めこのことをまず強調しておきたい。

そもそも、社会事象を対象とする調査においては、そこにある「現実」なるものをそのまま「写し取る」ことはできない。調査者はフィールドに入ったその時から対象者に影響を及ぼさずにはいないからだ。とすれば、調査は対象となる人や地域との関係性を大事にしつつ進めるしかない。そのためにまず、調査目的とその方法、成果公表の形を伝え、対象者の理解と協力を得るよう努めることが必要となる。

とはいえ対象の内部に入り込み仲良くなればいいという話でもない。調査対象の内側に入れば入るほど情報は濃く深く集まってくるが、データが偏ったり分析の軸がぶれたりする恐れがある。調査に際しては外部の視点と内部の視点の両方が必要であることをつねに意識しておかなければならない。また、関係性を作り上げたことで「建前」を超えた「本音」を引き出したとしても、それを調査結果として公開するかという点については、調査目的そして対象者との信頼関係と合わせて慎重な検討が必要である。

過去10年間を振り返るという今回の調査では、多くの人が当時の細かな感情や思考を、記憶の糸をたどりながら語ってくださった。だが、「忘れちゃった」「憶えていない」との言葉も多く聞かれた。もちろん工夫の余地はあるが、やはりプロジェクトと記録調査は同時に設計し進めることが望ましい。

人の記憶は曖昧で、語りながらどんどん更新／捏造されていく。「本当のこと」とは何だろうか。同じ出来事を共有していても、人によって視点も認識も異なる。「現実」は多元的で、唯一の正しい視点など存在しないのだ。その点、写真や映像は、そうした人間の記憶よりは、関係者が共有できる客観的な記録となりうる（もちろん、撮影者という主観性は排除できないが）と同時に、記憶を掘り起こすための媒介としても機能する。調査においてはインタビューと写真や映像を組み合わせるという手法は有効だろう。

今回のように、社会調査の方法をアートプロジェクトの現場にそのまま持ち込むことがよいのかどうか、今の段階で判断はつかない。ただ、この「苫平の事例研究」が一つのテストケースとして、他のアートプロジェクトの評価やアーカイブで応用・展開されていくことを期待している。

（執筆 吉澤弥生）

地域におけるアートプロジェクトのインパクトリサーチ
「苫平の事例研究」活動記録と検証報告　概要版

Impact Research of Art Project
“Day After Tomorrow Newspaper Cultural Department” in Azamihira village
Research report / Abstract

※ ※ ※

発行
公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室
〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階
Tel. 03 5638 8800
Fax. 03 5638 8811
E-mail info-ap@bh-project.jp
http://www.bh-project.jp/

作成・編集
特定非営利活動法人 地域文化に関する情報とプロジェクト［NPO recip］

協力
株式会社ヒビノスペシャル
明後日新聞社

デザイン
吉村麻紀

※本書に関する問合せ先
特定非営利活動法人 地域文化に関する情報とプロジェクト［NPO recip］
〒540-0026 大阪市中央区内本町1-2-7 寿ビル2FD号
Tel. & Fax. 06 6941 4899
E-mail info@recip.jp

©NPO recip　©東京文化発信プロジェクト室

※ ※ ※

本書は「東京アートポイント計画」のリサーチプログラム「Tokyo Art Research Lab」の一環として実施している「アートプロジェクトのインパクトリサーチ」の一環として作成しました。

◉Tokyo Art Research Lab（TARL）とは、アートプロジェクトを実践する全ての人々に開かれ、共につくりあげるリサーチプログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことから、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。http://www.tarl.jp

◉東京アートポイント計画とは、東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。
http://www.bh-project.jp/

東京アートポイント計画

Tokyo Art Point Plan